

## <エッセイ>

### 大学院というものについて、博士課程に在籍するアイドルより。

#### On Graduate School: From an Idol in a Doctoral Program

岡田彩夢

Ayame Okada

アイドルがグループ活動を行いながら大学へ通うということは、現代においては珍しくない。また最近では、大学院へ通うアイドルの存在も多くはないながら見受けられるようになってきただろう。しかし、10年前はこうもいかなかったことも事実である。筆者が活動を始めた2016年以前のことは定かではないが、中学や高校すらまともに通うことができない時代も間違いなくあった。例えば活動初期のころは、卒業するために必要な登校日数やテストの日以外に学業を優先することは悪とする風潮があった。体育祭や文化祭は勿論のこと、入学式や卒業式に出席できない子も多かった。当然、保護者の意向で仕事を休み学校へ行くこともできるが、そうすればメンバーや関係者の評価は芳しくないだろう。所謂「干される」という状況が発生しやすくなるため、できれば学業を優先することは皆避けたかったのだ。

アイドルとは多種多様なもので、中学や高校において学業を優先できない風潮と同時に、相反する要望として「賢い」キャラクターの要素が必要とされる現場もあった。トークイベントやバラエティ、ラジオにコラム執筆。人々に支持され応援されるためには、内面の豊かさも重要なのである。これらのことから、高校までとは違って大学進学はやや推奨される傾向にあった。筆者はもとより近代の日本文学を学びたかったため大学へ進学したのだが、勉強を心から面白いと思ったのは大学における学習が初めてだった。好きなものを知るための行為を勉強と呼ぶことができ、周りの誰にも咎められない環境に身を置くということはこの上なく幸せだろう。大学2年の年に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行し、キャンパスへ通えない期間が1年半ほどあったため、学部での学習を満足にできたかというところでもないが限りなく重要な時間であった。卒業論文のテーマは谷崎潤一郎作品に表象されるヒロイン像について研究するというもので、博士課程に進学した今もこのテーマの研究を続けている。実のところ、高校も谷崎潤一郎記念館を運営する大学の附属高校へ進学していたほど関心があったのだが、アイドル活動を始めたため転校したのだった。遠回りをしてしまったが、アイドル活動を行いながら大学院で谷崎の研究が続けられているため、結果的にはそう変わらないだろう。

修士課程へ進学することになったきっかけは、先に述べた研究テーマが卒業論文程度の時間やコストでは研究しきれなかったことにある。ファンにも院生が沢山居たことで背中を押され、プロデューサーも進学を快諾してくれたため晴れて修士課程へ身を置きながらグループ活動を行うことになった。学部と大学院の違い、修士課程と博士課程の違いについてよく問われることがあるため、ここで自身の見解を示したい。修士課程に進学してまず思ったことは、学部で学んだことは初歩的な基盤に過ぎないということだった。知らない学術用語や理論、院生でなければ

触れさせてもらえない研究資料。次々に襲い来る未知の知識に押し流されてしまわないよう必死に食らいつく2年間であった。そのため、修士課程は自身の研究テーマに向き合う時間というよりも、研究者の卵として自立できるよう基礎を修行する時間という感想だ。また、学部で学んできた自身の研究領域に固執せず、近い領域の専門的な学問を、比較的容易に学べる最後の時間でもあった。例えば、筆者は日本文学の専攻でありながら英文学の演習もいくつか受けさせてもらっていたのだが、必要であれば文学部の中にある社会学や哲学などの講義も受けることができた。勿論そんな体力や時間はなかなか残らなかったが、受けておけば良かったという後悔がある。博士課程に進学して思うことは、学部で学べなかった分野を教授から分かりやすく多分に教えてもらえるのは修士課程までだということに尽きる。少なくとも人文学において、無理をしても受講した他分野の知識は自身に必要なだった。

修士課程と違って、博士課程では講義を受講する必要がほとんどない。必要単位に含まれないのだ。では何をするのかというと、修士課程に籍を置く院生の研究発表を毎週聞いて、アドバイスをレポートとして提出するワークショップが中心だ。それ以外の全ては、指導教員の指導を仰ぎながら自身の研究を行うための時間である。つまり、かなり閉鎖的になる。理系と違い、グループになって研究することがないため、己と研究対象とが向き合うだけの時間が残されるのだ。修士課程では勉強に必死で自身の研究を行う時間が足りないと思っていたのに、博士課程では勉強という外部刺激があまり得られない代わりに時間は沢山あり、世界が閉じていく感覚がある。筆者は修士課程と博士課程で大学を変えたため、「大学に馴染むため」という口実でいくつか講義を受講した。このエッセイに目を通す人のなかには似た境遇を辿っている人も多いだろうが、勉強と研究は全く異なるということを大学院では突きつけられる。知らないことを知れることは面白いから、という動機だけではなかなか判別がつかないため厄介なのだが、自分は勉強に向いていて研究には向いていないかもしれないという結論を筆者は出している。だからといって、大学院を辞めることは今のところ考えていない。なぜなら、自身が知りたい答えがこの世界にまだないからである。自身が発見し大切に向き合ってきた問いに答えを与えられる人はこの世界に沢山いるだろうが、残念なことにも幸福なことにも、答えは「管見の限りない」のだ。

先に述べたように、閉じた世界で自身と向き合う博士課程に必要なのは恐らく外部刺激だ。学会へ積極的に参加すれば、その世界に参入したがつている研究者の卵という存在はだいたい可愛がられる。もしも、師と仰ぐことが許される先達の格好良い教授たちが居るのならば、存分に甘えるべきである。修士課程では正直なところアカデミックハラスメントの気配があり甘えることができなかったのだが、博士課程まで進学してしまえば生半可な覚悟だと一蹴されることもない。あったとしても、未来へ知恵を繋げる研究者の卵を足蹴にすることは業界全体としては賢い選択でないため、他に手を差し伸べてくれる教授や関係者が必ず居るだろう。

学部と修士課程、修士課程と博士課程の違いを脅しも交えつつここまで語ってきたが、筆者は大学院に進学することを迷っている人が居るのならば、進学することを勧める。向いていなければ、修士課程まででも良い。一度就職しても、やっぱり諦められないのなら戻ってくればよい。子育てが終わって自分のために時間を使いたくなったら、来れば良い。アイドルという社会と縁

<エッセイ>大学院というものについて、博士課程に在籍するアイドルより。

遠い神性を帯びた存在が、世界を知っても良い。そんな自由と不自由が許される、厳しくも無駄にならない時間が訪れることを、蟻地獄の中から筆者は約束する。

